



笑顔の先へ



barukazu

はじまり

笑っていた。

春の穏やかな日差しを、肩よりも少し長めの栗色の髪に浴びながら、彼女は今日も笑っていた。彼女は綺麗なのだと思う。簡単には近寄れないほどの上品な雰囲気纏っているし、肌の色は一点のくもりもなく白い。鼻梁だって驚くほどスツとしている。じっさい、容姿だけならクラスの男子が密かに行う「クラス対抗美少女決定戦」とかいうものにも、常に上位に名前をあげられている。

ただ、それは「特別枠」でだが……。

『並木亜矢』。彼女を知るものにとって、そして誰よりも僕にとってそれは特別な名前。

亜矢は僕の一番大切な人。彼女なのだから。